

【ポスター発表】

養護老人ホームにおける入所措置に伴う高齢者のリロケーション体験

○ 東海大学 中野いずみ (会員番号 000506)

キーワード：養護老人ホーム リロケーション 入所措置

1. 研究目的

高齢期はできるだけ住み慣れた地域や家に住み続けられることが望ましいと言われる。しかし、現代社会においては、多様な生活困難の末、介護保険サービスや生活保護等の支援があっても、望む地域、在宅での生活を送れなくなる高齢者は一定数、存在している。入所措置施設である養護老人ホームは、そうした様々な環境上、経済上の理由がある高齢者を受け入れている。(令和3年厚生労働省による社会福祉施設等調査によれば全国941か所に、約5万5千人が入所している。)

本研究は、養護老人ホームの入所初期における”リロケーション”の体験の実態を明らかにすることを目的とする探索的研究である。当事者へのインタビュー調査の質的内容分析により、養護老人ホームのリロケーション体験を可視化し、新規入所者への支援のあり方に役立てようとするものである。なお「リロケーション」とは、住み慣れた地域や生活空間、人との関係性があつた生活から、新たな場所へ生活を移すことと定義している。

2. 研究の視点および方法

本研究は、入所初期における入所者の主観的体験の語りをもとに、養護老人ホームは、当事者の人生にどのような意味や影響を与えているか、また、その後の「生の継続」「生の再構築」にどうつながっているのか、に研究の関心と視点をおいている。研究方法は、入所者に入所当時から現在までの主観的体験について、半構造化インタビューを実施、その語りをもとに質的内容分析を行った。具体的には、入所後5か月程度以上、3年以内の入所者にインタビューを一回実施した逐語録をもとに、佐藤郁也による質的研究方法を参考に定性的コーディングを重ね、その結果を図表に可視化した。分析の一連作業にあたっては質的研究に熟練した研究者によるスーパーバイズを受け、養護老人ホームでの職務経験が豊富な職員の助言を得て行った。

調査の実施時期は、2022年10月～12月中旬。対象者は全国6都道府県・8施設の養護老人ホームに入所し、入所前後を思い出し、言語化できる高齢者10名である。

3. 倫理的配慮

依頼の手続きは、全国老人福祉施設協議会関係の施設長、その知縁の役職員等を通じ、協力先として紹介された施設あてに施設長及び協力者の募集文書を送付した。施設の同意

を得た後、研究者が対象者の募集を説明、協力の内諾を得られた入所者に文書と口頭で概要の説明をし、同意書を得た。説明文書には話したくないことは無理に話さなくてよいこと、得られたデータは個人や施設が特定されないように処理し、入所施設に逐語録や語りの内容は知らせないことなどを明記した。本演題に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。本研究は東海大学「人を対象とする研究倫理委員会」による承認（2022年9月1日審査番号22128）を得て実施した。

4. 研究結果

対象者の性別は男性6名、女性4名、年齢は70歳代4名、80歳代が6名。入所前の居住場所は、自宅6名、刑務所・宗教関係の寮・路上等が4名。施設類型では、8名が個別契約型、2名は一般型特定施設に居住。2名は2人居室に居住。調査時間は33~89分。

結果、10名の逐語録から311のデータが抽出され、34のコードから12のカテゴリー（以下、【 】に示す）が見出された。その結果図を文章で説明すると以下の通りである。

入所に至っては、措置の事情につながる、それぞれの【顧みる過去】、【入所の踏ん切り】がある。今でも【入所後の違和感】を抱くことや【入所後に至る経緯にモヤモヤ感が残る】ものの、基本的な日常生活の基盤があることで【ここに入れてよかった】という安堵感や安心感を抱く。しかし、日々の生活では【施設という居場所ゆえの不自由感】や【心身の不調や支障をかかえながらの暮らし】があり、自ら賄えないことが多々あることも自覚する。【支援を受け、その方針にそわざるをえない歯がゆさ】、【コロナゆえの不自由感】や昨今の定員割れや老朽化した建物に【施設経営の心配】もしている。

また人との関係では、【入所者同士のふれあいや交流に助けられる】一方、一部の入所者に不快を感じることも体験する。しかし、次第に【入所者同士の処世術】を身につけ、入所を機に過去を清算し、自分が変わろうとする気持ちが生まれる、あるいは、日常に自分らしい生活リズムと楽しみを見出していく。今の生活の不自由感や漠然とした不安など【わかってほしい胸の内】はありつつも、他の入所者とのふれあいや支え合い、職員の支援で、“やむを得ず入った居住場所”から、【ここに入れてよかった】住処へと変わっていく。

5. 考察

入所措置に伴うリロケーションは、過去の人生との区切りとなる大きなライフイベントである。その過程で入所者は、施設であるがゆえの不自由感や自己管理ができない歯がゆさ、心身の不調や支障、入所者や家族等との関係での葛藤など、新たな環境に揺さぶられながら自分自身や暮らし方が変わっていくことを体験している。職員には、個々の過程に目を向け、日常生活の環境整備や入所者間の人的環境に目配りをする支援が求められる。

*本研究は、令和4年度全国老人福祉施設協議会・老施協総研の調査研究助成により実施した。